

# 2026年1月4日（日）降誕後第2主日

## 銀座教会 新年礼拝

礼拝招詞 「初めに、神は天地を創造された。神は言われた。「光あれ。」」  
創世記 1章

### 主の祈り

交説詩編 詩編100編1～4節  
全地よ、主に向かって喜びの叫びをあげよ。  
喜び祝い、主に仕え  
喜び歌って御前に進み出よ。  
知れ、主こそ神であると。  
主はわたしたちを造られた。  
わたしたちは主のもの、その民  
主に養われる羊の群れ。  
感謝の歌をうたって主の門に進み  
賛美の歌をうたって主の庭に入れ。  
感謝をささげ、御名をたたえよ。

### 使徒信条

讃美歌 119番 羊はねむれり 草の床に  
聖書 ルカによる福音書2章21～32節

21 八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。  
22 さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23 それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。24 また、主の律法に言わわれているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死がない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが“靈”に導かれて神殿の境内に入つて来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて來た。28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてください。30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。31 これは万民のために整えてくださった救いで、32 異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」

### 牧会祈祷

天の父なる神さま。新年礼拝を迎えました。あなたが最も愛する独り子をお与えになつた救いのご計画に与り、救い主と共に歩む人生をお与えください感謝いたします。

罪深く、小さな私たちを憐れみ、愛してください、顧みてくださったことを感謝いたします。12月には多くの方々と救い主の降誕をお祝いしました。子どもたち一人一人が大切な経験をすることも出来ました。感謝いたします。クリスマス礼拝において5名の方々が加えられました。神の家族としての交わりに加えていただき感謝いたします。入院されている方、自宅療養の方々がおられます。癒しの御手をお与えください。

主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン

## ルカによる福音書2章21～32節

主の年2026年を迎えて、共に新年礼拝をおさげ出来る幸いを感謝いたします。

本日与えられた御言葉は、主イエスが誕生八日目割礼を受け、マリアが清めの期間が過ぎた頃、ヨセフとマリアは幼子主イエスを連れてナザレからエルサレム神殿に出かけたことが記されています。ヨセフとマリアは、ユダヤの伝統を重んじています。モーセの律法によって定めの期間が過ぎたので長男を主に献げようとしているのです。神殿に出かけた目的は二つあります。一つには母マリアの清めのためでした。これは旧約聖書レビ記12章に記されています。出産後の母は汚れているとされ、40日過ぎて神殿で犠牲を献げて、清められると定められていました。この期間は産後の女性を休ませなければならないという出産後の母への配慮があったとも言われています。二人が神殿に出かけたもう一つの理由は、出エジプト記13章に記されている長男の聖別です。「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」という定めがありました。長男は主に献げられて、神のものとされると、律法によって命じられていましたからです。

出エジプトの出来事の中で小羊の血が戸口に塗られ、その印によって、イスラエルの初子が救われました。この事から、長男は神のものであるという共同体の理解がありました。この理解は長男だけを特別に考えているのではなく、長男が献げられることによって、同時にその家族全員が神の恵みと祝福を受けるという意味がありました。長男をささげ、代価を支払って買い戻す儀式が行われました。長男の奉獻式を通して、その家族の祝福の源が明らかにされるのです。主イエスはヨセフの家族の祝福の源となったということです。

ルカによる福音書が主イエスの奉獻を記している意味は、主イエスの両親がユダヤの伝統に忠実であったことだけを伝えているのでしょうか。そうではないと思います。主イエス奉獻を記している意味は、単なる長男の奉獻ではなく、神の独り子が奉獻されたことの意味を伝えているのです。ナザレのイエスの家族の祝福の源というだけではなく、主イエス奉獻は神の家族すべてにかかる祝福の源であるということです。神の祝福の源が主イエスによって与えられたのです。ルカだけが記す福音、喜びの知らせです。

主の年2026年新年礼拝において、ルカによる福音書を通して与えられている御言葉は、主イエスを通して神の家族である世界の教会が神の祝福に与る者とされたことを伝えているのです。これは、最も大きな喜びではないでしょうか。

日本の風習であるお宮参りは、その土地の守護神である氏神様に赤ちゃんが無事誕生した事を報告し、健やかな成長をお祈りしてもらうために神社に行き参拝する儀式です。キリスト者は土地の氏神を神としているのではありません。私たちは父子聖靈なる神を信じていますから、神社で氏神様に祈祷しなくても良いのです。教会でお祈りすることが神の祝福に与ることです。日本は八百万の神々を使い分ける文化をもっています。お願いする神がたくさんいる方が御利益も増えると考えます。しかしこのことはよく考えればおかしいことに気付くのではないでしょうか。それは人間がどの神にお願いしようかと神を選ぶようになっていることなのです。神が私を選ぶのではなく人間が神を選ぶという事です。神より人間が上になっている事に気付かなければなりません。本来信仰というのは人が神

を選んで自分の都合によって神を利用するものではありません。そうではなく、神が私たちを選び、神が私たちを愛し、私たちは愛の神に従うのです。それが神を信じる信仰です。

私たちは神を自分の利益のために利用してはならないのです。そうではなく、私たちが神に従うのです。主イエスが祝福の源となっておられることによって、主イエスを通して、神の祝福に与る信仰に生きることになるのです。

ヨセフとマリアが主イエスを抱いて神殿を訪れる様子を見ていたのが、シメオンという旧約聖書の伝統を継承する人でした。シメオンは、救い主に会うまでは死がないという約束が与えられていました。赤ちゃんの主イエスを抱いて、シメオンが神をほめたたえ、賛歌を歌ったことが記されています。この時、シメオンは、27節にあるように靈に導かれていたとあります。聖靈に導かれてこの幼子こそメシア（救い主）であると確信して歌います。シメオン自身の知識や教養で分かったのではなく、聖靈なる神の導きによって、シメオンは幼子主イエスが祝福の源であることを知ったのです。しかも、主イエスの家族にとどまらず、異邦人への光となっていると歌っていることに注目したいと思います。

「30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。31 これは万民のために整えてくださった救いで、32 異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」

シメオンは、ユダヤ人だけでなく万民のための救い主を迎えていたと歌っているのです。

ルカによる福音書の関心は、主イエスの奉獻、エルサレム神殿でのヨセフとマリアが主イエスを奉獻したことは、夫婦が律法に忠実に従う二人であったということ以上に大きな意味があることです。そして大切なことは、伝統的な律法に忠実であれば、救い主主イエスを祝福の源、主イエスこそ救い主であることを律法によって受けとめることができるはずであると教えているのです。シメオンは「正しい人」「信仰があつく」と紹介されて、律法に忠実であることが強調されていますが、律法によって救い主を待望し、聖靈によって主イエスこそ「救い主、メシア」である事を受け入れる信仰が与えられるという事です。

この御言葉は、同時に、神殿にはシメオンたち以外にはイスラエルの慰められるのを待ち望む信仰者がいなかつたと嘆いていると読むことが出来るかもしれません。この時代にこの人たちに光が当てられ、辛うじて旧約聖書の正当な伝統を継承する者が残っていたと伝えられているのです。これは当時の神殿に対する、痛烈な批判として聞かれなければならないと思われます。旧約聖書の歴史を通して、困難な時代の中でこそ救い主を待望し続け、聖靈に導かれて救い主を見抜くことの大切さを思わなければならぬのです。

福音書記者ルカは神の靈の導きによってシメオンの賛歌を通して救いの確信と喜びを伝えています。シメオンはユダヤの伝統を拒否することなく、神殿において救い主に出会う事が出来たのですが、ヘロデ王はじめ、ユダヤの指導者たちは、主イエスを排斥しました。旧約聖書の律法に忠実であるからこそ、遣わされる救い主メシアに出会ったのです。

ペルシャの王キュロスすらメシアと見なされる危うい時代が続きました。ユダヤのメシア待望が形骸化し、誰が真の救い主であるかを見分けることすら出来なくなっていました。そのような信仰の危機的状況の中で、真の救い主を見分ける事が出来たシメオンたちのような信仰者がいたのです。

律法の命令を実行するために主イエスが神殿に献げられたとき、シメオンは旧約聖書の伝統に忠実に生き、旧約の伝統の本流を汲み、靈に導かれ、まことの救い主を見分ける事が出来ました。そして待望していた救い主、キリストに出会いました。

シメオンの賛歌は、預言者イザヤの次の言葉を反映しています。イザヤ書40章1節  
「慰めよ、わたしの民を慰めよと あなたたちの神は言われる。2 エルサレムの心に語り

**かけ 彼女に呼びかけよ 苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた、と。罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた、と。」**

シメオンの賛歌の32節、イスラエルの慰めは、異邦人への啓示であることが、声高らかに讃美されています。神の真の救いが、ここで初めて正しく讃美されています。神の御名が讃美されるということは、ユダヤ人だけに限定されるのではなく、普く広がるのです。東方の学者たちがそうであったように、異邦人への啓示の光が輝き続けるのです。

シメオンは、主イエスを救い主として抱き、主イエスを通して異邦人にもたらす救いを見ました。その救いのためには、大多数のイスラエル人が主イエスを否むことも見通しています。主イエスに押し寄せる群衆と、十字架につけよと叫ぶ群衆の姿も見通されています。シメオンの第二の言葉はマリアにあてたもので「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます。」とあります。この剣とは、神の言葉を本当に信じることです。神を信じる信仰によって主イエスの真の家族になるということです。神の家族とは血縁によるのではなく、神の救いを信じること、神を信じて神の言葉を受け入れることによって、真の家族になると語られているのです。

ルカによる福音書8章にはイエスが語られた主の家族についてのみ言葉があります。21節「わたしの母、わたしの兄弟とは、神の言葉を聞いて行う人たちのことである」とお答えになった。」

私たちは、シメオンの賛歌を通して、神の家族の一人とされていることを感謝します。真の救い主を大胆に讃美え、主イエスの真の家族に加えられたことを最も大きな恵みとして喜びたいと思います。シメオンの讃歌を讃美することは、私たちが神の家族の一人として、神に迎えられている事を忘れないことです。クリスマスの後、シメオンを通して、苦しみの中で神の導きを見つめ続けた人々を通して、今、私たちは神の家族とされているのです。私たちは決して孤独ではありません。神の家族の一人です。

今なお地球上にはクリスマスを祝うこと、クリスマスの讃美を自由にすることが困難な国と地域があります。その人々の分も私たちは主の御言葉を信じて、神の家族である事を感謝し喜びたいと思います。私たちは、現在、最も世俗化した時代に生かされています。これまでのどんな時代よりも救い主が誰であるのか見分ける事が難しい時代に生きています。何も分からぬまま、手探りで生きることを求められています。現代は、真の救い主を見分ける事が出来ない時代、救い主を見失う時代に思えることがあります。しかし、そのような時代あって、私たちがシメオンの讃歌を讃美する事は、大きな意味があるのです。

不信仰の時代の中でシメオンが主イエスを抱いて讃美したように、私たちが主の年2026年、主日ごとに礼拝をささげ、祈り、救い主が誰であるかを明確にされる信仰をもつて明るく生きたいと願います。

**讃美歌 529番 ああうれし、わが身も**

**献 金**

**頌 栄 544番**

**祝 祷** 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。

アーメン